

「つたえること・つたわるもの」№211
〈いのち〉と〈からだ〉の社会学13
ドクターのナラティブ (物語) 4
父から学んだ東洋医学、O - リングテスト
——福岡博史さん

■波動医学で生体情報をとらえる、
全く新しい歯科治療。

東京ドクターズ（東京都内の病院、クリニック、歯科医院などの検索・紹介サイト）のインタビューに、福岡歯科グループ（日本橋茅場町院・新川院・祐天寺院・統合医療研究所DC・RIM マッサージ治療院）を率いる福岡博史理事長は、次のように述べています。

自然医療を学んでいた時に環境問題についても勉強をして、ECO 検定を受けたことがありました。そしてそのとき、地球の環境問題は口腔内の問題にとっても似ているということに気がついたんです。たとえば地球上の大気汚染は、口呼吸によって細菌だらけの空気が体内に入り込んだり、タバコの有害物質で口の粘膜が汚染された状態。また、土壌汚染や地盤沈下は、歯周病菌によって歯を支える組織が侵される現象と同様だと考えられるのです。地球の生態系が生物多様性によって守られているように、口の中の生態系を保つ細菌の数は500種類以上。ところが、歯のブラッシングをはじめとした清掃状態が悪いと、虫歯菌や歯周病菌が増えて口腔内環境が悪化し、やがて全身の健康状態に支障をきたすようになります。地球と同じように、口の中は小宇宙。地球の環境問題と「オーラル・エコロジー（口の中の環境管理）」を対比してご説明し、その対策をご一緒に考えることで、皆様の健康づくりをお手伝いしたいと思っています。

（「東京ドクターズ」福岡博史理事長の独自取材記事）

早速、拙著『あきらめない！もうひとつの治療法』

（厚生科学研究所、2007年）からの再録です。

文中に出てくる「O（オー） - リングテスト」とは、指で作った輪が開きやすいかどうかで病気の有無や薬の有効性、浸透性を調べる、つまり測定者の筋の緊張（トーンズ）を利用して被験者の生体情報をとらえる検査手技のことです。

（※肩書などは当時、文体は「である調」のまま）

「父から学んだ東洋医学、O - リングテスト
を生かしたい」

波動医学で生体情報をとらえる、全く新しい歯科
治療が始まった

福岡博史さん（福岡歯科グループ理事長）

近年（※1980年代後半）、咬合（噛み合わせ）の不具合が、実は頭痛の原因だったり、頸椎のズレなどから起ることが知られるようになり、歯の治療を口の中だけの局所治療にとどめず、歯（口腔）と全身との相関を診るホリスティック（全人的）な視点で治療にあたる歯科医師が増えている。

なかでも、福岡博史理事長が率いる福岡歯科グループでは、患者の生体情報を「O（オー） - リング」テスト、波動測定器でとらえ、ツボ通電などでペインコントロールしながら、個々の患者に合わせた治療法を模索している。新しい波動医学に基づいた「全身的な歯科治療が」いま大きな話題を呼んでいる。

★麻酔が効かない歯痛を、

1本の鍼が止めた

40年ほど前（1960年代）のこと、はげしい歯痛を訴える急患が夜更けの2時に福岡歯科の扉を叩いた。局所麻酔（注射）で神経を抜こうとしたが、体格のよい患者で鎮痛剤がなかなか効かない。何とか痛みをとろうと考えた福岡明院長（福岡博史理事長の父、現福岡歯科会長）は、隣で開業していた鍼灸師に応援を求めたのである。すると、首のうしろの風池と

いう経穴（ツボ）に1本の鍼を打っただけで、その患者の激痛はうそのように引いていった。

このことが、「歯だけを診るという歯科医ではなく、全身との相関関係や心理状態にも目を配るホリスティックな歯科治療」を、親子二代にわたって継承・発展させながら、現在の福岡歯科波動医学研究室・統合医療研究所開設への大きなエポックとなっている。

「1983（昭和58年）、私が東京歯科大学を卒業した年に、それまで父が研究していた東洋医学を歯科の領域で会を組織しようということで、日本歯科東洋医学会が誕生しました。昔から、福岡歯科では鍼とか灸はごくふつうのことで、家じゅうにモグサの匂いが立ち込めていましたから、東洋医学に抵抗感はありませんでした。しかし、私自身は先端医学が一番すばらしい、かっこいいと思っていましたから、当時はオクルージョン（咬合学）、インプラント学（人工歯根）、審美修復学（美しい歯）など、欧米から入ってくる新しい歯科技術に引かれました。

しかし、後年、私に歯科医師としての実力がつき始め、実際の噛み合わせ、歯周病の治療、インプラントの臨床を積み重ねながら、人間のからだはそうそう学問通りにはいかないということがわかってきました」

メインは近代的な歯科医療の勉強に置きながら、福岡さんはその一方で誕生したばかりの日本歯科東洋医学会に参加したり、漢方薬の勉強会に顔を出したり、父の福岡明さんが指導する歯科医師を対象とした疼痛管理（鍼灸）セミナーにも助手役を買って出たという。

「臨床経験を重ねるなかで、人間とは生身の人間であって、必ずしもメカニクな存在ではないとわかってきて、それまで日本歯科東洋医学会やセミナーで学んだことが重要だと実感するようになりました。それは単に漢方薬の処方や鍼灸の経穴のとり方などのテクニックではなくて、いつもその会は人間を幅

広くトータルに診る雰囲気にあふれていましたから、先端治療では解決できない問題を考えるには面白いと思うようになりました」

★鍼灸、気の世界から、

○-リングテストへ。

福岡さんは大学卒業と同時に、都内に何ヵ所もの診療所を持つ福岡歯科グループのスタッフ歯科医師として働くことになった。本来なら、大学院に残って専門の勉強をしたり、大きな病院で研修を受けたいとも思っていたが、ちょうど父の福岡明さんが肺炎をこじらせて長期入院し、卒業後の進路もベッドサイドで相談することとなったのである。

「闘病1年あまりで父は退院するのですが、入院中の検査漬け、薬漬け医療に疑問を感じて、本格的に気の勉強を始めました。心身統一合気道、気の研究會宗主である藤平光一先生（※心身統一合気道會創始者）の気圧療法学院に入門し、そこで呼吸法を学んで、気を充実させたり、気が出せるようになるとすっかり元気を回復し、大病したことがうそのように活動的になりました。父の流れとしては、まず歯痛をとった鍼灸（経穴）の東洋医学があり、次に自分の病気がきっかけで気の世界を学び、それから○-リングテストの世界へとつながっていきました」

○-リングテストとは耳慣れない言葉だが、現在もニューヨークを拠点に活躍中の医学・物理学者で、鍼・電気治療の世界的権威でもある大村恵昭博士（※2025年8月逝去）によって開発されたもので、被験者の健康状態やからだの悪い部分、さまざまな物質との相性、薬との相性や適量を判定する、比較的かんたんな検査法のことである。専門の脳循環に関する西洋医学だけでなく、学生時代に独学で東洋医学を学んだ大村博士は、東西両医学の長所を結合して、1970年ごろにこの○-リングテストという画期的な診断法を開発したのである。早くからこれに注目した父・福岡明さんは、日本BDORT（バイ・デジタ

ルO-リングテスト) 協会認定歯科医認定第1号と
なったが、福岡博史さんもすでに同協会の歯科医認
定を受けている。

このテストを受ける被験者(患者)は、一方の手
に薬などチェック物質を乗せ、もう片方の手の指(た
とえば親指と人差し指)でO型の輪(O-リング)
を作る。被験者が作ったO-リングに術者(歯科医
師)の指(たとえば左右の人差し指)をやはりO-
リングの形でかけ、両側に引っ張って、被験者の指
の輪を開こうとする。それに対して、被験者に開か
れまいと抵抗させ、O-リングを維持しようとする
指の力の程度を把握するものだ。O型の指の輪が開
くか開かないかで、被験者のからだの状態などを診
断する方法である。

★O-リングテストで、 生体情報を取り出す。

からだにとって悪い刺激や情報(手に乗せた合わ
ない薬や歯科材料)を受けると、指で作ったO-リ
ングがかんたんに開いてしまう。よい情報(からだ
によく合う薬や歯科材料)の場合には、指によるO
-リングは閉じたままである。また、被験者の手を
からだの気になる部分に当てながら、もう一方の手
でO-リングテストをすることで、その部分の状態
がどうなっているか、病気のスクリーニングもそれ
なりにチェックできるという。

「なぜ、私がO-リングテストに興味を持ったかと
いうと、東洋医学という経絡や漢方処方 of 古典を
読め、脈診ができないと一人前ではないという雰
囲気がありますが、これなら漠然としていた気の世界
が目に見える世界になる、そう思ったからです。そ
こで、父に協力してO-リングテストで噛み合わせ
をチェックする実験をやりました。歯科では日本で
最初だったと思いますが、この実験で歯科治療に利
用価値があると確信しました。

O-リングテストの歯科治療での大きな利点は、

何といてもその患者さんに合った薬や使用する歯
科材料が、瞬時にわかることです。これによってむ
だな薬を飲ませたり、歯科材料(歯の詰め物など)
の金属アレルギーなどが未然に防止できるようにな
りました」

O-リングテストによって患者の生体が発する、
ある種の生体情報を患者からとり出せるというだけ
でなく、こちら(歯科医師)から有用な情報を与
えることで、痛みなどの症状を改善することもでき
るかもしれない、それが気の世界を生かした双方向性
の治療法ではないかと、福岡さんは考えたのである。

しかし、O-リングテストで得られる生体情報は、
マップ化(マイナス反応が出た弱い部位を体表上に
プロットする)はできるが、あくまでも人間の筋力
を使ったアナログ診断なので、そのデジタルな情報
は数値であらわすことはできない。

★歯に詰める金属などの、 生体への安全性を推定する。

「O-リングテストで得られた成果を自分なりに整
理していたときに、MRAという波動分析器がアメ
リカから入ってきました。気の理論を経営にとり入
れている船井総研の船井幸雄所長が推薦したことも
あって、あつという間にブームになりました。これ
がアナログ的なO-リングテストの結果ともよく似
ていたので、O-リングテストの結果(生体情報)
が機械で測定できるのなら、こんなに面白いことは
ないと、大変興味を持ちました。

ちょうどそのころ、中国仙道健康研究会の赤木厚
史会長と超意識気功協会会長で歯科医の久米清さん
から“気功”の効果を測定できるLFT(ライフフ
ィールドテスター)を紹介され、当院の勉強会で気
を測定するデモを行いました。すると、気を入れ
る前と後で明らかに数値が変わったのです。これが
波動医療を研究するきっかけとなりました」

早速、ベテランのLFTオペレーターに依頼して、

各種歯科材料についての波動計測を実施し、その結果を歯科領域では初の学会発表を行った。そこでわかったことは、従来の歯科医学データと同じように、歯の詰めもの材料のうち、金の含有率の高い金合金、白金加金（プラチナ）、セラミック（陶磁器）系の波動値が高く、生体との適合性、親和性、安全性が推定できるというものであった。

しかし、これまでよく使われていたアマルガム（銀・錫・銅の合金を水銀で練り合わせたもの）は、長年の間にはごく微量であっても水銀が流出して、金属アレルギーやさまざまな病気の原因となるおそれがあり、波動的にも問題がありそうだという結果が出た。

その後、1997（平成9）年のサトルエネルギー学会（波動分析器の測定対象としての微弱エネルギーを研究する学会）のシンポジウムで、波動ブームの火付け役となったMRAタイプの波動分析器には、微弱エネルギーを測定するようなプログラムはなく、そこで測定された数値は「オペレーター自身の意識」であるという見解が出された。

つまり、それは客観的な数値ではなく、測定者の期待感や先入観などが影響しているというのだ。この見解が出されると、コンピュータによる生体情報を計測する機械であると考えていた学者の多くは、いっせいに「これはインチキだ」と騒ぎ始めた。

★測定者の感性を通して、 エネルギー波動を診る。

「すでに私たちはO-リングテストをやっていたから、もちろんそこには測定者の感性が介在するわけです。それを否定するのではなくて、プラスにとらえて最大限に生かす方法はないか、そういうスタンスで波動測定を使っていました。気の世界を正しく理解した上で波動測定を行っていけば、ふつうの医療器械ではまったく読めない生体情報が見えてくる。これですべてがわかるというのではなく、あ

くまでも補助的な診断法です。補助的ではあるけれども、スクリーニングによってある程度の見当がつく、画像診断で見落としした部分が発見できる、あるいは被験者の深層心理的なものまで読みとることができる」

歯科医師の診察といえば、一般の医師と違って口の中は調べるが、全身を診る機会はほとんどない。治療の前に歯のレントゲン撮影はしても、血液検査をする歯科医はいない。せいぜい、問診で内科的な病気や薬などのアレルギーをたずねるくらいだ。1本の歯を削って、ムシ歯を詰めて終わりという治療ならその程度でもいい。

しかし、顎の骨を削って人工歯根を植え込むインプラントなどでは、それを長期にわたって許容できる身体状況か、インプラントの手術に耐えられるか、麻酔薬や抗生物質の種類や使う量、金属（チタン）へのアレルギーはないかなど、通常の問診ではチェックしきれない項目数は多い。

それを解決するため、福岡さんは通常の検査のほかに、バイ・デジタルO-リングテストによってとらえられる生体情報と、磁気波動共鳴分析器（現在はMIRSという機械を使用）で計測する微弱なエネルギー情報を治療に生かしている。10年ほど前までは、O-リングテストというだけで白い目で見られていたが、最近は口コミやインターネットでの検索、雑誌や新聞の記事を読んで来院する新しい患者が増えているという。

★歯が原因で起こった、 ひどい頭痛が治った。

42歳になる女性患者（フリーのコンサルタント）のケースを紹介しよう。

8年前から、3ヶ月に1回の割合で襲ってくる頭痛に悩んでいた。最近では毎月1回となり、ひどいときには2日間にわたって吐き気をもよおし、ろくに食事もとれない状態になっていた。左右のこめか

みから前額部にかけてと、後頭部がズキズキと痛んだ。胃弱、便秘ぎみであるほかには、特段の自覚症状はない。これまで受診した病院での検査結果はいずれも「異常なし」。たまたま、中医学（中国の伝統医学）の医師に診てもらったところ、口の中にある金属の影響で「気」が滞っているのではないかと指摘されたという。

まず、口腔内の電圧を測る機械で上下の歯を調べたところ、21番の歯だけが異常に高い電圧を示したので、21番に入っていた金属を除去した。つづいてバイ・デジタルO-リングテスト、磁気波動共鳴分析器によるチェックを行った。

全身状態を診ると同時に、この患者に合う歯科材料を調べた結果、21番の歯には金属でないセラミックを入れることになった。

「21番に入っていた金属を外した段階で、すでに頭痛が軽減されました。先日、久しぶりに受診されましたが、ひどかった頭痛はほとんどとれていたようです。お仕事がハードなので、疲れが出ると少し痛みが出るものの、食事はちゃんととれているそうです。

また、顎関節症の治療の場合でも、一般の歯科医では、噛み合わせ矯正用のマウスピースのようなものを入れて、安静にするように指示されることが多い。私たちは、そこにプラスアルファの生体情報を、O-リングテスト、磁気波動共鳴分析器でとります。たとえばO-リングテストでウイルスの反応が出たら、ウイルスに効果のある漢方薬やサプリメントを出します。さらに経穴に貼ったゴム電極に低周波通電（約5ミリアンペア）をして、血液の微細循環障害を改善してやることなどで、1週間くらいで治ってしまうケースもあるんです」

2年ほど前、福岡歯科では歯科診療室に加えて、新たにRIM（統合医療研究所）をオープンさせた。波動医療をとり入れた歯科治療と平行して、鍼・灸、マッサージ、リフレクソロジー（足の反射療法）な

どの代替療法を受けられる絶好の場が誕生したのである。

「波動医療は患者さんと治療者の間で、お互いの波動をキャッチボールするようなどころがあります。治療者はレベルの高い波動が出せるように、患者さんからの波動をいち早くキャッチできるよう、日ごろから自分の感性を磨いておく必要があると思います」

福岡歯科グループが、歯科医療の大海に投じた統合医療の一石は、いま大きな波動となって世界に向かって広がっている。